

「日本人でもなかなか体験できない経験」をしてきました

さて1月下旬のこと、「日本の花が見たい」というリクエストを受けて、「この時期に日本の花と言ったら梅に限る」と即断。ところが、早速インターネットで調べたところ、曾我梅林も湯河原梅林も時期尚早とのこと。そこで、中澤秀夫兄(7組)に電話して相談したところ、「熱海梅林は咲き始めたんじゃないかな。それに糸川桜も観られるし。」という嬉しいガイドを得ることができました。さすが元「ホテルニューさがみ屋」支配人。「糸川桜」などという名前を聞いたのは初めてのことだったのですが、ガイド通りに動いた結果「1月中の梅と桜の花見」を楽しむことができました。リクエストをした長女が喜んだのは勿論ですが、私自身も「日本人でもなかなか体験できない経験ができた」と大喜びしました。

花見に先駆けての兵糧計画は長女の提案によるものでした。これもインターネットを検索して得た情報によるものだったのでしょうか、「漁港の駅 TOTOCO 小田原に行く」と“おさしみ食べ放題”っていうのやってるから、それを食べてから行こうよ。」というものでした。「えっ、花見に行く前に刺身食べ放題！あまり粋な計画じゃないなあ。第一、アルコールなしで刺身を食べたことがないし。」と気が沈んだのですが、ここはコロナ禍のお陰で2年間も日本に帰ってこれなかった長女の提案を受け入れようやということになりました。オーストラリアにも寿司や刺身がかなり出回っていますが、さすがに“おさしみ食べ放題”というのを目にするのは初めてで「これぞ日本の料理」と思ったことでしょう。

同伴した私とカミサマ(我が家における“カミさん”の尊称です)も初体験だったのですが、分厚い刺身の盛り合わせに多少辟易としたものの、「小田原漁港の魚市場から仕入れたばかりの魚のお刺身」の新鮮さはさすがで、一同満足して熱海へ足を向けたものでした。「漁港の駅」もそうですが、「おさしみ食べ放題」も小田原ならではのものではないかと思います。何よりも“進歩的な小田原”を感得できたのが嬉しいことでした。



小田原から熱海に進む過程で車窓から目にする海岸風景も、シドニーの海辺とは趣が異なる様子で、長女は何度も「やっぱり日本っていいなあ」を口にしていました。そして、程なくして熱海到着。更に、伊東線「来宮」駅の前を通って坂道を一走り登ったところに熱海梅園があります。入場するや、「熱海梅園」という掘り込みのある石碑の両脇に植わった早咲きの白梅と紅梅がそれぞれ花を咲かせて私たちを待ち受けていてくれました(右の写真)。「日本一早咲きの梅」と称していますが、そんな気負ったところが少しも見えない穏やかな佇まいでした。



明治19年に開園したという熱海梅園は、毎年11月下旬～12月上旬に第一号の梅の花が開くのだそうです。まぎれもなく「日本一早咲きの梅」ですね。樹齢100年を越える梅の古木を含め、60品種・469本の梅が咲き誇り、「早咲き→中咲き→遅咲き」と順番に開花していくので長期に渡り観梅が楽しめるのだとか。また、梅に始まって、桜、新緑、紅葉と四季を通じて楽しめる庭園になっています。紅葉の方は「日本一の遅い紅葉」だそうですよ。園内には、ひよっとすると山女魚か岩魚が釣れそうに見える綺麗な溪流が流れていて、せせらぎの音を聞き花々を愛でながら散策することができるなんて、熱海市民はなんと素晴らしい資産に恵まれているのだらうと羨ましく思います。なかには、かなり開花が進んだ紅梅もありました(下の写真)。花が八重で淡いピンクですがなんと上品な花姿でしょう。梅園内には、

梅見の滝、梅園五橋の他に、韓国庭園、中山晋平記念館、澤田政廣記念美術館もあって、ほのかな梅の香りを感じながら、心静かに散策の一時を過ごすことができました。



江戸端唄に♪梅は咲いたか桜はまだかいな♪というのがありますが、ここ熱海は、まだ1月だというのに、梅も桜も開花しているのですから驚きです。糸川桜は、熱海の市街地の銀座通り商店街の隣の通りの糸川沿いに全58本の花を咲かせていました(下の写真)。「熱海桜」が正式の名称ようですが、ここ糸川沿いでは、早咲きの桜が1月初旬から開花するのだそうです。同じ静岡県で東伊豆の河津桜が早咲きの桜として有名ですが、熱海桜ことにこの糸川桜は、ほぼ同時期に開花する沖縄のカンヒザクラ(寒緋桜)を凌ぐ「日本で最も早咲きの桜」と言われているそうです。ピンクの濃い河津桜と違って、ソメイヨシノと同じ色調の淡いピンクで、昔は“色町”と呼ばれていた糸川の街並みに上品な趣を加えていました。



翌日、LINEで私の熱海紀行を得意げに伝えたところ、寒い時期は熱海在の水口幸治兄(7組)から「熱海に来たなら声をかけてほしかったな!」という軽いクレームが返ってきました。「熱海に来たのだから“地主”にご挨拶しなくちゃと思ったのですが、いやはや“主客”(長女のこと)のスケジュール繰りの忙しいこと。あたふたと熱海の地を辞することになってしまいました」と返しましたが、水口兄文中の「糸川の桜はWalkingの途中にほぼ毎日見えています。」という一文は胸にグサリときました。こちらが「日本人でもなかなか体験できない経験」と思っていたことを日常茶飯事とされていたのですね熱海の住人殿は。熱海市がこんなに豊かな観光資源にめぐりあえているのも熱海市の観光事業推進に心血を注いでいた故大野英市兄(3組)のお陰なのかなと思いました。水口、中澤両兄と山本哲照兄(7組)とカナダ・アメリカドライブ旅行に出かけた際(2001年)に、私たちの行程に合わせて前日バンフ入りし、経営していたInns of Banffで接遇して旅の疲れを癒してくれた大野兄を懐かしく思い出しました。